

文部科学省補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（牽引型）」

2020年度 連携型共同研究 成果報告書

研究課題名	新型コロナウイルス感染症に対応するための ICT を活用したコミュニティ音楽実践の開発
研究代表者	沼田 里衣 (大阪市立大学 文学研究科 准教授)
共同研究者	上野 智子 (和歌山大学 教育学部 准教授) 菅 道子 (和歌山大学 教育学部 教授) 山崎 由可里 (和歌山大学 教育学部 教授)

本研究は、新型コロナウイルス感染症によって、対面での活動が制限されている状況において、障害のある人々を含む多様な人々がどのように音楽を通して「つながり」を感じることができるかについて探求するものである。研究背景には、学校やコミュニティ等に当たり前にあった「居場所」がなくなり、人々が心理的疎外感やストレスを負っている状況がある。従って、従来とは異なる「場」の創成は、喫緊の課題である。

研究方法としては、第一に、音楽教育、コミュニティ音楽の領域における現場調査を行い、既に発表されている ICT 技術の導入方法を検討し、対象者にあった方法についてプランを練った。その結果、音楽教育の領域において、感染の懸念から外部講師の受け入れが困難な状況があること、また、コミュニティ音楽領域において、主に知的な障害のある成人が音楽活動を継続することが困難な状況があることがわかった。また、従来からの課題として、即興性の少ない音楽を用いた教育の場面で、対象児童の演奏への参加が困難な状況が続いており、それが現場の教員の課題となっていることもわかった。そこで、義務教育課程の児童とコミュニティ音楽実践の場をオンラインでつなぐ案を練った。

第二に、こうした案に基づき、ICT 技術を導入し、和歌山県の特別支援学級の児童と教員、及び兵庫県の知的障害者を含む即興音楽グループとの連携により障害児や一般市民の交流を目的とした実践を行い、意見交換やインタビューの実施により効果を検証した。具体的には、2021年2月3日に特別支援学級の児童10名、教員8名、及び和歌山大学教員（上野、菅、山崎）と、阪神間で活動するコミュニティ音楽団体「おとあそび工房」のメンバー8名及び大阪市立大学教員（沼田）が、事前に用意したプログラムを実施した。和歌山の特別支援学級では、事前に遊び歌を練習し、本番に遠隔で披露した。神戸市のおとあそび工房では事前に絵楽譜を作成し、和歌山の児童にも依頼した絵楽譜を互いに郵送し、当日交互に遠隔で演奏を披露した。遠隔では、互いの演奏に興味深く画面に見入る人も多く、アンケート結果からも各参加者の満足度の高さが窺えた。遠隔に関わる機器使用の課題は残ったが、今後、感染症の流行の有無にかかわらず、遠方の人々との交流による即興音楽活動が提供しうる利点も見えてくるものであった。

こうした内容は、2021年2月17日に開催した「OCU テニューアトラック研究集会」にて、上野が「学校の中で音楽すること」というタイトルで発表を行った。発表、及び研究集会の他の登壇者とのディスカッションでは、特に障害のある児童・成人の音楽活動への参加が困難であるという課題を抱えた現場に対して、予算や移動時間等の負担を最小限に交流し、多様な人々がともに音楽する方法の提供が可能であるという点が今後の可能性を示すものであるという意見もあった。

以上より、継続して行ってきた共同研究の成果を、感染症流行のなか、新しい方法を見出すことができたと言う点で、成果を得られたと考えている。本内容は、2021年度の音楽教育学会での発表、及び当学会誌への投稿を予定している。